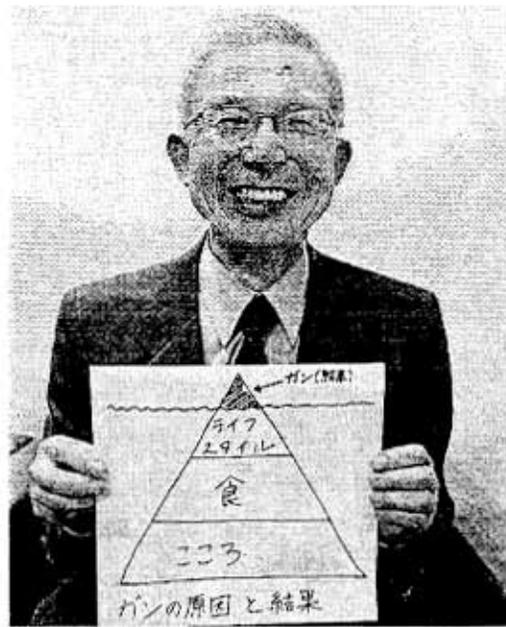


## 末期がんから復活できた理由は

日本人の2人に1人ががんになるという時代。がんを告知されたら、手術、抗がん剤、放射線という三大療法を受ける人が大半だが、その一方で生活習慣、食、心の在り方を変え、自己免疫力を高めることで自然治癒に成功した人たちがいる。がんを治し、がんになる前よりもさらに、心身ともに健康になることを目指し啓発活動を展開するNPO法人「ガンの患者学研究所」（横浜市）に集うがん患者らの会「いのちの田圃の会」の佐々木英雄会長に聞いた。

（佐藤弘）

がんに立ち向かう「いのちの田圃の会」 佐々木 英雄さん



ささき・ひでお 1939年、宮城県出身。42年間勤務した仙台銀行を退職後、末期がんを告知されたが、食事、生活スタイル、心の在り方を変えることで1年でがんを自然退縮させた。

## 聞きたい

「がんのかかわりは、2007年4月、大病院で前立腺がんを診断された。リンパには転移していないが骨転移がある末期がんで、三大治療はできないと言われた。告知を受け、がん死という思いが頭をよぎり、谷底に突き落とされたような大きなショックを受けた」

「手術も何もできないなら、免疫力を上げ、自然治癒力でがんに立ち向かってみようと思った。かつて本に目を通して記憶にあった『体を温め、免疫を高めれば病気が治る』という新潟大学の安部徹教授の言葉を信じ、食事は動物性タンパク質を避けて、玄米菜食を

徹底。地域の世話役や孫の世話など、退職後も続けた新聞を読む暇もないような忙しい生活を改めた」

「それでも一人では心細かったらう。」

「その年の9月、神奈川県開かれるガンの患者学研究所主催の講演会に、がんを克服した「治ったさん」らが集まるのをチラシで知り、出かけてみた。がん

になったのには原因があるはず。それを取り除かないまま、対症療法を行っても、再発・転移の心配はつきまとう。そんな考え方の下、がんに挑む仲間たちの姿に感動。自分も治る、治せるんだという心のスイッチがオンになった」

「それから生来の完璧主義を改め、体に優しい手当て、玄米菜食、ウォーキングや俳句などゆったりとした心で、楽しく暮らすよう心掛けたら、がん告知から1年後、画像診断でがんが消えていた」

「医者もまさか、驚いたことだらう。」

「現代医療を否定するわけではないが、医者に言わ

## 生き方変え、免疫力上がった

れるまま三大治療を施した結果、副作用で正常な細胞まで冒されることがあるのも事実。私たちの主張は現代医学では異端扱いされることが多いが、余命宣告をされたながらも、患者会には私のような「治ったさん」が現実には300人以上いる。このことについては、治る道は決して一つではないという主張にも説得力はあると思う」

「今後、どんな行動を。今、がんになる人があまりにも多すぎる。そこで今月29日、がんの原因や、その治し方について書いた小冊子『すべては、あなたが治るため』（無料）を5千部、西日本地区11カ所で一斉配布する。福岡では私も街頭に立つ予定だ」

「年中無休のような仕事の仕方、ヒタミン、ミネラル不足の食事、人間関係など、ストレスにあふれた現代の生活習慣ががんにつながる。そうしたことを私たちのキャンペーンによって、がんになった人だけではなく、がんになる前に気付いてもらえたらうれしい」

九州での小冊子配布は29日午前10時～11時、福岡市西日本新聞本社前▽長崎市JR長崎駅高架広場▽宮崎市宮崎山形聖本館前▽鹿児島市鹿児島中央駅東口の4カ所。事務局・安倍さん045(962)7466(月～金曜日午前9時半～午後1時)。